

福島潟の開発の先駆け 山本文右衛門

山本文右衛門は頸城郡鉢崎村（柏崎市）の出身です。詳細は不明ですが、百姓でありながら船を使った商売をしていたとも、松平伊豆守の家臣だったともいわれています。

丈右衛門が、福島潟の開発を幕府に初めて願い出たのは1742（寛保2）年のことですが、このとき許可は出ませんでした。しかし丈右衛門はあきらめず、再び開発を願い出ました。当時、福島潟は新発田藩の領地だったので、幕府は、潟周辺の33ヵ村を1754（宝暦4）年に幕府の領地とし、その翌年、丈右衛門に開発を許可しました。許可されたのは、水面と草生地、303haでした。

丈右衛門は、今の東京都葛飾区のあたりに所有する土地などを抵当に入れ、3,000両の資金を作り、不足分は資金援助を受けて、開発工事を始めました。

工事は、潟に流れ込む水量を減らしつつ、潟の排水をうながすため、新発田川・太田川などの流路変更が行われました。

しかし、1770（明和7）年11月、新鼻や太田など約89ha（石高は1,910石）を開発したところで、丈右衛門は亡くなってしまいました。あとには4,700両以上の多額の借金が残し、その後、丈右衛門の開発地はすべて幕府に没収されてしまいました。



丈右衛門の供養塔（前新田の延寿庵）

丈右衛門夫婦の戒名が刻まれています。1818（文化15）年建てられたもので、その後に潟開発を行った市島徳次郎ら「水原十三人衆」が50回忌を記念して建立したと伝えられています。



丈右衛門の墓（新鼻）

1864（元治元）年、潟開発に係わっていた斉藤七郎治永治が、丈右衛門を慰霊するために建てたといわれています。



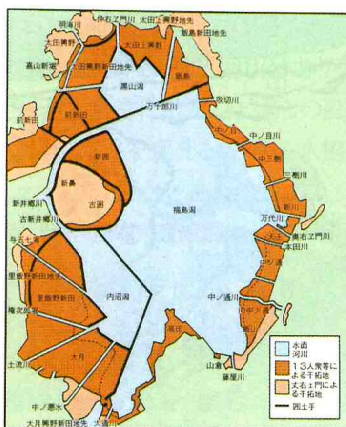
開潟神社（新鼻甲）

福島潟と周辺一帯の開発の先駆者、丈右衛門と永治が祭神としてまつられています。1876（明治9）年に新鼻甲の人々が先祖への感謝と村の団結のため建立しました。

『北区お宝ものがたり』は、博物館などで1冊800円で頒布しています。

福島潟を開発して田んぼをつくろう!

近世の開発



福島潟は、貞享年間(1684~88)には、水面の広さが約5,800ha(約5,800町歩)との記録があります。今の福島潟の約30倍の広さで、とても大きな潟でした。

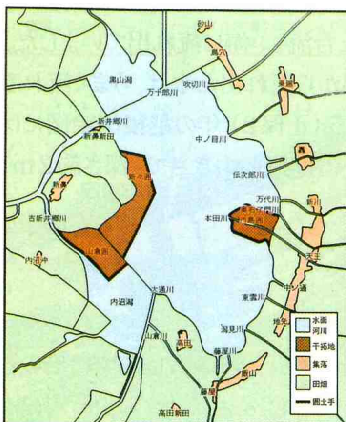
■ 近世の開発

開発が進んだのは、1755(宝暦5)年に幕府が、福島潟の開発を頸城郡鉢崎村(現柏崎市)の山本丈右衛門に許可したときからです。丈右衛門は、潟に流れ込む水量を少なくするため加治川や新発田川の改修、新太田川の掘削などを行い、新鼻や太田地区など89haを開発しました。

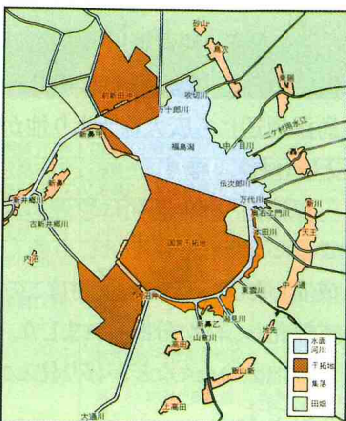
1790(寛政2)年、水原町の市島徳次郎をはじめとする13人衆が開発を行いました。彼らは開発する場所を土手で囲み、水を抜いて水田にする方法をとりました。また、潟に流入する河川の上流から土を流し、潟の底を高くする方法もとられました。さらに、潟の全面開発を目指し、浜茄子新道、山倉新道などの堤防を築き、潟を分割しましたが、洪水などで不成功に終わりました。13人衆の開発面積は潟周辺部の452haでした。

1823(文政6)年には、潟周辺は新発田藩の預地となりました。翌年から藩では、阿賀野川から新井郷川への逆水止めの工事や土流し、各新道の堤の強化を積極的に行いました。また、ジョレンで潟の底の泥を掻き上げて田に入れるなど、田畑の安定を図り、452haの耕地を開発しました。

近代の開発



現代の開発



『北区お宝ものがたり』は、博物館などで1冊800円で頒布しています。